

卒業生らによる「学部長慰労会」

昨年3月の卒業生2人が、「学部長慰労会」なるものを企画してくれた。3月で学部長をおりて、なにもないまま1ヵ月半が経過した。やっと自分の時間、研究に集中できる時間を確保できるようになってきたが、なんだか「リズム」が取り戻せないでいた。こんな折に慰労会を企画してくれて、望外の喜びである。

せいぜい数名の卒業生が集まり、仕事のことなどを話すことができればと思っていた。それが30数名の卒業生と数名の在学生、それに退職者を含めて8名の教員が参加する盛大な「催し」となった。乾杯後の挨拶で、学部長として私なりに奮闘努力してきたが、こうした「催し」を卒業生が企画して、こんなにも大勢の人に参加してもらい感激していると述べた。いろいろな年代の卒業生が、ゼミなどの枠を超えて幅広く参加してくれたことが、とりわけ嬉しかった。「教師冥利」に尽きるというものだ。

人文社会学部が誕生して10年経った。短大と市大教養部との統合、新学部創設の頃が懐かしく思い起こされる。大学院人間文化研究科も博士後期課程までが完成した。慌ただしく10年が過ぎ、最後の2年間の学部長を勤めた。この2年間は「法人化」の準備にあけくれ、緊張としんどいことの連続であったが、教職課程の立ち上げなど一定の「成果」もあげられ、バトンタッチすることができた。激務の2年間で卒業生らに慰労してもらって、疲れも吹っ飛び、もやもやした気分を一新することができそうだ。卒業生らに感謝するばかりだ。

学部はすでに1200名余りの卒業生を送り出してきた。現代社会学科にかぎっても、7年前からこの3月まで、多くの卒業生の顔が浮かんでくる。やはり2年間つきあったゼミ生が印象深い。この機会にゼミ生を年度ごとに思い出していくと、46名のゼミ生を1人の「中退者」もなく卒業させることができた。毎年7名前後のゼミ生を迎え、ゼミや卒論指導を行ってきた。卒論のテーマから、ゼミ生の顔が浮かんで来て、テーマ設定から執筆に至るまでの「指導」のことなどが想起される。

思えば名古屋市立女子短大に就職してからの「教員生活」も、すでに27年経つ。講義やゼミなどで学生に「熱弁」を振るってきたつもりだ。とにかく、わかりやすく問題提起的な講義を心がけてきた。ダジャレにも「磨き」をかけてきたつもりではあるが、それにしても、大学の仕事で卒業生らに「慰労」してもらったのは今回が初めてであり、思い出に残るひと時であった。あらためて2人の「いい感じの」幹事に感謝したい。

(2006年5月13日 記)